

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科博士課程2年 八坂哲弘

京都大学ジャパングートウェイ構想の一環において、国際共同学位プログラムの現地調査のため、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学を訪問し、現地の教授や学生と交流を行った。

日本の学生がハイデルベルク大学・ストラスブール大学に留学した場合、どのような学習環境に身を置くことになるかを調査する為に、大学や大学図書館、周辺の移住環境を実地に視察し、また現地の学生との交流を行うことによって、彼らの学習環境について、また学生生活についての話を伺うことができた。ハイデルベルク大学・ストラスブール大学、共に優れた学習環境を有しており、留学先として優れた大学であることを実感した。

また、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学の学生の日本学部を訪問し、日本に関心を持ち日本への留学の意志を持つ学生達と交流を行った。まず、驚いたことにはハイデルベルク大学日本学部には三百名もの生徒が在籍しているとのことであり、日本への高い関心がうかがわれた。そして、今回の交流において分かったこととして、彼らが日本に関心を持つきっかけとして、漫画やアニメの占める位置が非常に大きいということがある。また、漫画・アニメに限らず、日本の音楽、近代文学なども同様にきっかけとなるようである。総じて言えることは、日本のポップカルチャーへの関心というものの占める割合が大きいということであり、それは無視できるものではないと思われた。とは言え、それらの関心はステレオタイプな現代の日本像に対するものであり、例えばハイデルベルクの日本学部では、そのような日本像に対し、現実の日本のあり方を教育することにも力を入れているようであった。また、日本学部のカリキュラムは主に日本語の習得に力点が置かれており、ハイデルベルク大学の日本学部においては週に30時間ほど日本語の講座を受けるとのことである。ストラスブール大学の日本学科では、日本への留学が義務づけられており、同様に日本語の習得に力を入れていることが窺われた。彼らのカリキュラムの力点が日本語の習得にある為、実際に両大学の学生が日本に留学し、専門的な日本の研究を行うにあたっての、京都大学のバックアップの必要性が感じられた。その為、京都大学ジャパングートウェイ構想による受け入れ態勢の整備は非常に有意義かつ必要性の高いものであることは疑い得ない。

最後に、今回の派遣プログラムに参加しての具体的な感想を述べておきたい。私の専攻する日本哲学史は現在世界的に関心を集め始めている。日本の哲学の更なる国際化を目指すにあたって、海外の研究者の増加は必須の課題である。今回、実際に日本学部を訪問することによって、ヨーロッパにおける日本への関心の高さを窺い知ることができたことは非常に有意義であった。また、私自身ハイデルベルク大学・ストラスブール大学の学習環境に大変な魅力を感じ、留学への意志が深まった。

今回このような有意義な機会を得ることが出来たのは KUASU 支援室のご尽力によるものであり、大変有り難く感じている。今回渡航していない他の研究者達にもこのような機会を体験してほしいと思った。しかしながら、自費での渡航というものも困難であり、KUASU 支援室の存在意義は大きいと言わざるを得ない。